

生研 ニュース

PHOTO 倉科満寿夫

1998.12.1
No.55

IIS TODAY

●第4部大学院生
田中 義久

写真は第4部香川研究室の博士2年生の田中義久さん(42歳)。田中さんは生研での社会人博士プログラムの学生第1号だそう。本務は科学技術庁の金属材料研究所プロセス制御研究部。奥様と4歳の娘さんと2歳の息子さんの4人家族である。生研に対する印象は、一言で言うと「刺激的」。多種多様な研究が同じ敷地の同じ建物で行われていることがその理由である。古めかしさに驚く人の多い生研の建物に関しては、目黒の金属材料研が似たようなものなので特に違和感はないようだ。ただし一歩外に出ると「大繁華街の六本木」があり、特に夜の「生研の静寂さ」と「六本木の賑わい」の強烈なコントラストは、生研に対して感じるもう一つの「刺激的」な部分だという。

社会人博士プログラムへの進学は、職場の上司や仲間、家族の理解があって実現。家庭・職場・学校の3足のわらじで多忙だが充実した毎日であり、可能性のある人には是非挑戦して欲しいとおっしゃっている。利害関係の無い若い優秀な学生さん達との新しい人間関係の構築は、生研での研究成果に勝るとも劣らない財産だという。気恥ずかしくて学割をまだ使ったことはないが、学生さんとの交流のせいか、最近よく「若返ったんじゃない」と言われるそうだ。現在の悩みは、忙しくて趣味のバレーボールや卓球ができないこと、そして家族サービスが怠かになっていることだという。子供さん達は、パパの発表が終わるのを首を長くして待っているのだそうだ。「パパ、頑張ってるね。」 (目黒公郎)

台湾・国立中正大学工学部と部局間交流覚書を締結

9月24日、坂内所長、池内教授(3部)、渡辺ほか2名が現地を訪れて標記の調印式を行った。サイズの似た九州に台湾をたとえ、台北を博多とみれば、中正大学は熊本あたりの嘉義県に位置し、特急で4時間ほどの距離。北回帰線のほぼ真下、サトウキビ畑やパイナップル畑、三期作の水田が広がる南国の街である。

同学は1989年創立の総合大学で、工学部・大学院にはコンピュータ・情報工学、電気工学、機械工学、化学工学の4学科があり、教官63名と学生1300人を擁する。工学部長の Ren C. Luo (羅仁權) 教

授は93年4月から1年間、本所寄付部門「インテリジェント・メカトロニクス・東芝」の客員教授を務め、原島・橋本研究室とセンサーフュージョンに関する研究を行い、その成果をもとに国際会議「IEEE Symposium on Sensor Fusion」を立ち上げている。

昨秋の本学国際交流委員会に計画書を出し、台湾の機関との締結が本学初であることに鑑み、覚書の文面などを両機関で慎重に検討したのち、本年3月に承認された。

調印をすませ、坂内所長と Chou(周英雄) 副学長がそれぞれの機関の活動をビ

デオなどで紹介し合ったあと、Chow 副学長と Luo 教授の案内で学内諸施設を見学させていただいた。

これを機に、センサーフュージョン、インテリジェント・メカトロニクスなどの分野で共同研究がさらに進展し、国際的にも大きな貢献ができると期待している。(国際交流室長 渡辺 正)



中正大學工學院與日本東京大學 生産技術研究所學術交流簽約儀式



うーん、むずかしい……でも面白かった

都立高校の先生がた、本所見学に来訪

高校の先生はいろいろな研究会を組織している。そのひとつ、東京都理化学教育研究会(会長:石曾根誠一・小松川高校長)は毎年、都立校が休みになる10月1日(都民の日)に会員の見学会を企画する。教育関係でおつき合いのある世話役先生の依頼により、今年は本所の見学とあいになった。あいにくの豪雨にもかかわらず

40人(化学・物理ほぼ半々)が来所され、午後いっぱいを楽しんで(?)いただいた。

見学は4ヶ所をお願いし、小林・谷口・大島研究室(2部)が流れのシミュレーションと画像計測実験、橋研究室(5部)が無響室デモ、音響シミュレーションと共鳴器の可視化実験、工藤研究室(4部)がソフト化学技術の紹介とエレクトロク

ロミズム薄膜作成実験、そして小職の部屋がバイオセンサーと光合成の基礎実験。ご多用中のところ「10名ずつの4ラウンド」に息つく暇もなく立ち向かっていただいた教官・スタッフの各位に心よりお礼申し上げます。

後日うかがった感想は、「面白かった」から「さすがにむずかしい」までスペク

トルが広く、「たいへん有意義だった」が
たぶん公約数なれど、夕刻の懇親会で大
島まり先生とじっくりお話してきたのが
なんととっても最大の感激だったらし
い。
(第4部 渡辺 正)

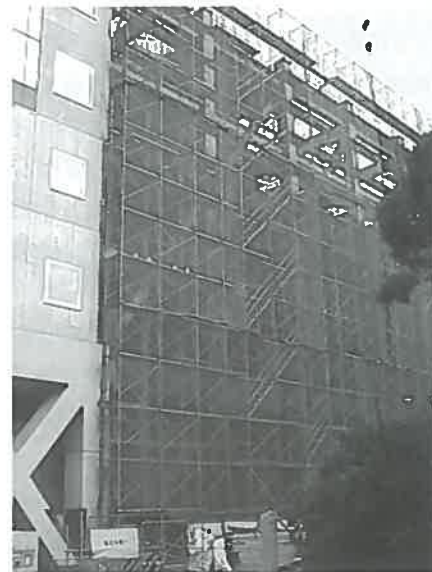


NEW CAMPUS

第 I 期研究棟への 移転が始まる

所長●坂内 正夫

いよいよ生産技術研究所の駒場新キャンパスへの移転が
現実を開始されようとしています。まず、生研移転の第一
陣として、11月中旬に5部から数研究室がC棟へ移転する
運びとなり、現在引越しに伴う諸作業が開始されています。
また、この移転開始に伴い、必要となる新キャンパスにお
ける計算機ネットワーク環境も着実に準備が進められ、駒
場新キャンパスにおける仮設 LAN の運用が開始されます。
一方、生研の B 棟建物およびに国際産学共同研究センター
第 I 期分建物も、現在、建物の基礎並びに構造部分の工事
が滞りなく進められ、既に建物が完成している C 棟ととも
に新キャンパスの完成時の姿が徐々に見えてきました。(B
棟写真) 更に D 棟は、1 日も早い工事着工にむけ、建設現
場での準備作業が急ピッチで進められています。また、生



研の第III期工事分の E 棟と F 棟も、先日施設部によるヒヤ
リングを無事終えて、現在は工事発注のための詳細設計に
取り掛かろうとしています。このように、第 I 期、第 II 期、
第 III 期それぞれのフレーズでの移転に向けた作業が着実
に進められていることを皆様にご報告いたします。

いよいよ生研の仲間が長年慣れ親しんだ六本木のキャン
パスを離れ、駒場新キャンパスに移転する運びとなりま
した。これからも駒場新キャンパスの整備と六本木からの
移転を円滑に進めていくために、皆様方のより一層のご協
力をいただきたくお願いいたします。(所長 坂内正夫)

女性職員による新キャンパス厚生施設見学会

去る9月3日(休)、女性職員有志による新キャンパス厚生施設見学会が行われた。

より使いやすい厚生施設の実現に向けて女性の視点からの意見を反映するために実施されたものである。第II期以降の工事に対して出された意見は「トイレ・洗面所・静養室・シャワー室等を全体的にもう少し広くすると共に、空調設備や国際電話の設置、案内図の分かりやすい掲示」などであり、これは厚生委員会でも了承された。(厚生委員代表 丸山正子)



4 技術官等による技術発表会開催される

第7回技術官等による技術発表会が平成10年9月22日(火)に開催された。

この発表会は技術職員の知識および能力の向上を図り、お互いの技術交流の場として行われているもので、今回は口頭発表7件、ポスター発表5件であった。また、参加者は外部8名、内部61名の計69名であった。

発表内容としては、技術情報交流WWWサイト開設、低温変形装置の試作、マイクロ搬送アクチュエータ、都市公園の利用調査、真空蒸発法の利用研究、Pbサーファクタントエピタキシー、ラチ

スシエルの座屈、など各技術の詳しい内容から展望まで幅広く紹介された。また質問も時間が不足するほど活発であった。回を重ねる毎に他の分野の人にも理解されやすいように部内で発表練習を行ったり、サンプルを持ち込んだり、発表にも多くの工夫がなされ、高度な技術紹介もわかりやすくなった。

本発表会を開催するに当たり、所全体から多大

なご協力を頂いた。ここに記して謝意を表します。(技術発表会実行委員会)



生研記者会見報告

東南アジア熱帯域における水文気象強化集中観測の速報

—アジアモンスーン域における豪雨と早魃の発生機構の解明と予測の向上に向けて

虫明功臣教授は、9月16日アジアモンスーン・エネルギー水循環観測研究計画についての記者会見を行った。この計画は、世界気候研究の副計画である「全球エネルギー水循環観測研究計画」の一環として、日本の気象・水文研究社のリーダーシップの下に、(1)地球規模の熱・水

循環におけるアジアモンスーンの役割の解明、及び(2)モンスーンアジアの降水と水資源の季節予測の向上、を目的として立案され、1996年から5か年計画で文部省国際共同研究として実施されている。

生研では、東南アジア熱帯域における熱・水循環プロセスを担当しており、タ

イ、マレーシアに建設した固定観測基地での集中観測、移動式観測、ゾンデ強化観測、人工衛星による広域観測及びそれと同期させた地上観測などにより、世界でかつて得られたことのない貴重なデータを取得し、データ解析とモデル構築を行っている。固定基地の設営には、本所試作工場も参加している。

これまでに、(1)森林密度による林内熱・水の移動、(2)雨期と乾期の大気構造の相違、(3)タイにおける森林伐採による降雨への影響、などが解明されつつある。

2000年以降の人工衛星センサーの活用を組み込んだフェーズII研究計画への発展が期待される。(第2部 浦 環)



東京大学技術職員研修の実施

平成10年度技術職員研修(機械工作・木工工作・ガラス工作)が10月6日より9日まで4日間の日程で行われ、受講者は機械工作が3名、木工工作が2名、ガラス工作が4名の計9名であった。

従来より要望が多かったガラス工作の研修が今年度より実施された。初日はガラスの特性の講義に続き、管材でけがをしないために切断面の処理方法に関する実技・演習を行ったが、パーナから噴き出す強い炎にとまどっている受講者も見られ、緊張した一日だった。2日目からはガラス管を溶融する手つきも慣れて、炎の中でガラスを飴のように変化させ、最適な細工状態にするコツを会得した様子だった。最終日の質疑・討論の席上、

「ガラス工作の研修が行われることは非常にまれで貴重な体験をした」「熟練した技術の重要性を改めて感じた」等の感想が述べられ大変好評であった。

また、デュワービンの製作では、物性研ガラス工作室の協力を得られたことにより、初めての研修としては幅広い内容で行うことができた。

今回は技術的にまったく異なった内容の3研修を同日程で行ったため、準備や研修の進行に多少の不安はあったが、4日間を無事に終えることができた。

なお、各研修の主な

内容は、機械工作関係「鍛造による特殊工具の製作、フライス用切削治具の製作」、木工工作関係「ふた付き箱の製作、塗装及び組手加工」、ガラス工作関係「ガラス管の曲げ・伸ばし、デュワービンの製作」等であった。

(試作工場長 魚本 健人)



VISITS

●生研訪問者

8月31日(月)

スロバキア・スロバキア工科大学工学部長
FILLO, Ludovit 教授他1名

10月19日(月)

米国・ワシントン大学 GOULD, P.L. 教授及び SRIDHARAN, S. 教授

●客員研究員

氏名	国籍・現職	在籍期間	受入研究室
BOUROUINA, Tarik	仏・CNRS 研究員・パリ南大学基礎電子工学研究所 助教授	1998.11.1～1999.10.31	第2部 増沢研
SHEN, Bo (沈 波)	中国・南京大学物理学科 助教授	1998.11.1～1999.10.31	第3部 荒川研
NAPRSTEK, Jiri	チェコ・チェコ科学アカデミー理論・応用力学研究所 副所長	1998.9.30～1998.10.12	第1部 中桐研
BAI, Ruke (白 如科)	中国・中国科学技術大学 助教授	1998.10.1～1998.10.31	第4部 瓜生研
PENG, Wei (彭 偉)	中国・浙江工業大学機電工程学院 助教授	1998.10.20～1999.10.19	第2部 谷 研
LU, Ning (呂 疑)	中国・長春市市役所オフィス自動化管理センター 副センター長	1998.10.20～1999.10.19	第3部 坂内研
MIHALJEVIC, Miodrag J.	ユーゴスラビア・セルビア科学芸術アカデミー数学研究所 研究助教授	1998.12.1～1999.3.4	第3部 今井研

●博士研究員

氏名	国籍・現職	在籍期間	受入研究室
HAM, Hee-Jung (咸 喜正)	韓国・日本学術振興会 特別研究員	1998.10.1～2000.9.30	第5部 村上研
YOON, Kangsup (尹 康 燮)	韓国・釜山大学校 機械技術研究所専任研究員	1998.9.1～1999.8.31	第3部 橋本研
TAGEL-DIN, Hatem	エジプト・カイロ大学 講師	1998.10.1～1999.9.30	第5部 目黒研

Snap Shots

10月9日

麻布消防署管内
自衛消防活動競技会



PERSONNEL

●人事異動

発令年月日	氏名	異動事項	新官職(所属)	旧官職(所属)
10.10.1	三浦 孝樹	名称変更	経理課経理第一掛長	経理課経理掛長
//	若杉 基康	//	// 経理第二掛長	// 給与掛長
//	有森 健晴	//	// 契約第一掛長	// 用度掛長
//	楠瀬 英二	//	// 契約第二掛長	// 出納掛長
//	田平 慎也	勤務換	// 経理第一掛	// 経理掛
//	松本 健一	//	// //	// //
//	石黒 庸子	//	// 経理第二掛	// 給与掛
//	正藤 邦明	//	// //	// //
//	中山 晋	//	// //	// 出納掛
//	岩下 悟	//	// 契約第一掛	// 用度掛
//	小城 哲夫	//	// //	// //
//	野口麻衣子	//	// //	// //
//	夏目 邦彦	//	// 契約第二掛	// //
//	鷓沢 正浩	//	// //	// //
//	古山 純一	//	総務課第4部業務掛	総務課厚生掛
//	細谷 敦子	採用	総務課厚生掛	
//	坂本真奈美	//	総務課第3部業務掛	

AWARDS

所属	職・氏名	受賞名・機関	受賞項目	受賞日
第3部	助教授 橋本秀紀	Robo Cup ジャパンオープン JSAI 優秀賞 社団法人 人工知能学会	大局的情報と局所的情報の統合によるロボットの行動制御	1998.4.11
第3部	教授 今井秀樹	Golden Jubilee Paper Award, The Institute of Electrical and Electronics Engineers, INC.	A new multilevel coding method using error-correcting codes	1998.8.17
第2部	教授 中川威雄	AMPT'98国際賞 ウィリアムジョンソンゴールドメダル AMPT 先端素材加工技術会議	材料加工研究における生涯業績	1998.8.27



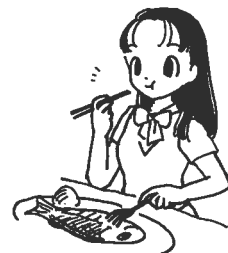
フォークとおはしの組み合わせ

焼き魚は和食のメニューとして代表的なものの一つです。私もアジの塩焼きなど、大好きです。ところが、焼き魚は上品に食べるのが難しい料理の一つでもあります。おはしで身をつまんでも、なかなかむしりとれず、仕方なく手指で魚を押さえたり、つまんだおはしを振るなど、少々みっともないことになりがちです。

一方、欧米にも魚料理は豊富です。イタリアに旅行したときに、レストランで黒鯛に似た魚の塩焼きを食べたこともあります。ところが、何しろナイフとフォークで食べるので、その身どりにくさ、食べにくさは、和食以上のものでした。

さて、最近になって気が付いたのは、日本式でも西洋式でも焼き魚は食べにくいけれども、その食べにくさの原因が違うということです。ナイフとフォークの場合、ナイフが細かい作業に向いていないうえ、魚の身はばらばらになりやすく、フォークでは口に運びにくいことなどのために食べにくいのですが、おはしの場合困るのは、単に魚の本体が動いてしまうことです。そこで、ためしにフォークで魚を押さえながらおはしで食べてみたところ、まことに快適に身どることができました。しかも、今まで身どることに気をとられていたのが、味を楽しむ方に集中でき、おいしさも増すようです。

細かい操作ができるおはしの利点と、両手を使うという西洋式の利点を組み合わせたこの方法は、焼き魚を美しく、しかもおいしく食べることができる作法になりうるような気がします。和食に金属のフォークは少々なじまない面もあるので、木や竹など、おはしに合わせた素材のフォークが理想的ですが、なにはともあれ、お宅のフォークで一度ためしてみませんか。
(第2部 増沢隆久)



INFORMATION

■ 年末年始のスケジュール

● 庁舎管理

平成10年12月29日(火)から平成11年1月3日(日)までの年末年始の期間、以下の事項に注意願います。

*正門・裏門は閉鎖されます。磁気カード無しの出入りはできません。

*電話は、直通電話を除く所内電話の都内発信はできますが、受信はできません。

*所内レクリエーション施設(屋内外のすべてを含む)の使用はできません。

● 電気計算機室

ベクトル計算機 VX・計算機室設置のワークステーション及び UTnet2 は年末年始をとおして利用できます。ただし、トラブ

ルがあった場合は、1月4日(月)まで対処できませんので、予めご了承ください。

● 図書室

図書室は、12月25日(金)から1月4日(月)の間、閉室いたします。ただし、12月25日ならびに1月4日に限り、貸出はいたしません。雑誌閲覧室はご利用いただけます。

また、学術情報センターのサービスが休止となりますので、文献複写依頼・現物借用依頼・参考調査などで、年内の回答をご希望の方は、お早めに図書室カウンターで手続きをお済ませください。

PLAZA

8

近くて遠い ネットのむこうから

第3部

館村 純一

今年の春よりカリフォルニア大学サンディエゴ校(UCSD)の R. Jain 教授の研究室にお世話になり、マルチメディア・データベースとそのユーザインタフェースについて研究させて頂いている。現在、インターネットを介した画像データベースの知的検索機能を開発している。

この原稿と写真もインターネットを介して投稿している。ネットを介して日本のニュースは随時手に入るし、日本の研究の継続や計算機管理などで生研に「在宅勤務」することも多い。一人で計算機に向っているとここが何処だか分からなくなってしまう。こうしてみると、インターネットは国際化だけでなく「国内化」の動きも持つようだ。何処に行っても空間を越えて「日本」の中にいるようにも思える。

その一方で、インターネットがいくら普及しても自分のいる場所に意味がなくなるわけでもない。ネットからは事実関係や意見などの「表現されたもの」は伝わるが、人がどう感じているかといった表現以前の感覚までは感じられない。映像通信技術が発達すれば伝わるものは多くなるだろうが、現実世界において無意識に肌に伝わってくるもの



UCSDのインターナショナルセンター。留学生や外国人研究者を支援する施設だが、ボランティアの人々の活躍が大きい。研究室より外での「現実生活」を支援していただいた。特に研究者本人よりも家族にとって、このような場があることが大切に感じた。また、ここを中心として知り合った人たちの「ネットワーク」にも大変お世話になっている。

の代わりにはならない。人間が現実世界に身をおいて生きる以上、メディアは現実世界を置き換えるものではなく「拡張」するものであり、現実の感覚と複合されてこそ豊かなものになる。

計算機がネットにつながっているからといって情報工学がどこで研究しても同じにはならない一つの理由がここにある。現実世界と切り離されて研究が行われているわけではない。

今回のカリフォルニア滞在では、研究者との交流や大学の環境などの研究生活のみならず、日常生活面でも「触発」されることが多い。70以上のチャンネルをもつケーブルテレビ、低料金で身近な映画館、張り巡らされたフリーウェイ、障害者に配慮のある街や公共交通機関。単に物質的に豊かというだけではない。物のあり方や人の行動から、民主主義、個人、自由、合理性、多様性といった概念を言葉ではなく肌で感じるができる。ここにはマルチメディア技術が発展すべき土壌がある。

情報工学、情報社会に関してアメリカという肥沃な土壌から学ぶべきことは数知れない。しかしそれが単なる情報の輸入に終わってしまわないためには、日本という場所において自分の肌を感じるものから問いを發していく必要性

も感じる。その上で、日本という土壌から世界に通用するものも結果的に産まれてくるのではないかと思う。

最後に、貴重な機会を与えて下さった方々にこの場を借りて感謝致します。

伊豆・戸田マラソンレース(42.195km)に参加して

総務課

沼尾 吉美

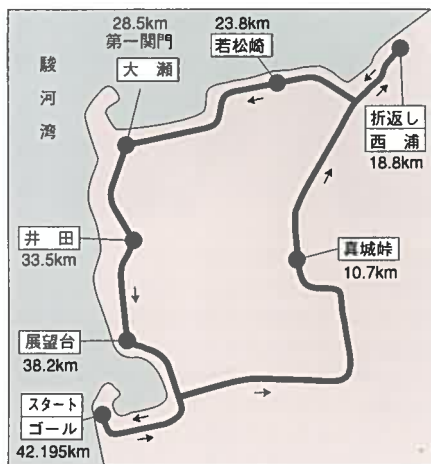
毎年恒例の東京大学学生部運動会主催の伊豆・戸田マラソンレースに昨年に続き参加した。2回目の参加となるといろいろと考えてしまう。時間内完走が出来るかどうか、また、余裕があって昨年よりいいタイムが出るだろうか。昨年と比べると余り練習が出来なかった。しかし、もう一度チャレンジしてみたかったので参加に踏み切った。マラソンは自分との戦いであって、何回走っても走っている時の気持ちは同じであると思う。お天気はとても良く富士山が眩しいくらいによく見えて、高い所から頑張つてと言われているようであった。しかし、今回は残念ながら体調が良くなって31km位でリタイアをしてしまった。思いもよらない出来事だったので、これ以上走ると皆さんに迷惑をかけると思い断念した。

走る動機は、身近にこの大会で完走した人がいて、とても感動したこと。そしてオリンピックで銀・銅メダルを2つ獲得した「有森選手」やお正月に箱根駅伝等をテレビで見るとの感動。自分の体験を、他の人に感動として伝えることができることはとても素晴らしいことだと思ふ。軽い気持ちで「私も出てみようかな……でも走れるかな……でも恥ずかしいな……」と思ひながら昨年の4月頃から、戸田マラソンに向けて密かに、早朝、お昼休み、夕方、ジョギング講習会に1人で参加しながら練習に励んだ。自分の力を試すために、いろんなハーフマラソン大会に練習のつもりで参加した。普段10km以上走ったことがないので、不安でしたが無事完走した。「自分をほめてあげたい」と思ひとても嬉しかった!!この分ならひよつとして戸田マラソンでも



走れるかも知れないと、少し自信を持った。昨年は学生部だったので参加者は5名、皆で走れば楽しいでしょう!?

5時起床、7時スタート(制限時間6時間) 5時起床はつらかった!第一関門28.5km大瀬補給所を4時間で通過出来ないでリタイアになってしまう。このことを脳裏に入れて、いざスタート。まだ頭の中は眠っているし、体も慣れるまで本調子ではなくて、後からひたすらついて行く。ついに急勾配に突入だと思った瞬間疲れてしまった。とてもマラソンコースとは思えないアップ・ダウンが長く続くなか、何とか第一関門を通過。「あと半分、油断は出来ない。」単独走になっている自分にそう言い聞かせながら、途中戸田港を眼下に見ながら、休む暇もなく時計とにらみあいながら走り続けた。ゴールの灯台が見えてきて無事時間内完走が出来た。「ヤッタ!!ヤッタ!!でもしんどかったわ」終わった後に沼津で食べたお寿司とビールがとっても美味かった。年令・タイムはヒ・ミ・ツだよん。通算7回完走(内フルマラソン3回)





音は人間にとってきわめて大切な情報伝達手段であるだけでなく、音楽・演劇などの芸術文化にも不可欠な要素である。一方、負の側面として、都市の高密度化に伴う騒音が今や重要な社会問題の一つとなっている。我々の研究室では、このような音を活かす方法、殺す方法の両面について多角的な研究を行っている。医学・工学・心理学・情報工学など多岐にわたる分野で音に関する研究が行われているが、我々の研究室では主として人間の住環境（都市・建築）における“聞こえる音”を対象として研究を行っている。その内容を大別すると、建築音響（ホール音響、建物の防音性能、吸音・遮音工法の開発など）、騒音制御（各種交通機関の発生騒音・振動の伝搬予測および防止方法、アクティブ騒音制御技術の開発など）、音響計測法（音響インテンシティ法などの新しい音響計測法の開発及び応用）、音響シミュレーション（数値解析による音場解析、模型実験法）である。昨年度からアンナ・プライス助教授をポーランドから招聘し、人間に対する騒音の影響など心理学的研究も本格化してきている。これらの研究のうち、最近のトピックの一つとして“ステージ音響”の研

究を紹介する。

ホールの音響に関する研究としては、これまでは聴衆の立場、すなわち客席における聴取条件に主眼が置かれてきたが、それと同時に（むしろそれ以前に）、音の発信源となる演奏者がいかに演奏しやすいか、すなわち演奏者が自らの芸術的感興を日頃錬磨した技量によって如何なく発揮することができる音響的条件を整えることが、我々建築技術者の重要な役割の一つである。そこで3年ほど前から、このような条件を物理的・心理的に明らかにし、工学的に実現する方法について研究を開始した。その一つとして、所内の音響実験室（無響室）内にステージの音響条件をシミュレートした音場を作り、プロの演奏家のご協力を得ながら、演奏（演技）のしやすさのための条件を探る実験を進めている（写真）。

ホールの研究など、もういい加減にしろという硬派のご意見もいただいているが、文化に結びついた研究だけに奥が深く、また興味も尽きない。もちろん、上述のとおり騒音低減のための（地味な）研究にもまじめに取り組んでいる。



フルート演奏に対する反射音の効果に関する実験（峰岸荘一氏）

電氣的シミュレーションによるバイオリン演奏（千住真理子氏）



編集後記

早いもので、平成10年も残り1ヶ月となった。年頭に目標とした事柄がどれほど達成されただろうか。毎日のようにやってくる雑務(?)の締め切りに追い立てられながら、気づいたら師走である。周囲の方々にも随分ご迷惑をかけたのではと反省している。

ところで今年は駒場キャンパスの第一期分の建物も完成し、いくつかの研究室はすでに引越しを済ませている。しばらくは六本木と駒場の2つのキャンパスでの活動を余儀なくされる。この間、生研ニュースが両者を結ぶ情報メディアの1つとして、より有効に機能できるよ

うに、その役割の重要性を念頭に、これからのニュース作りに励みたいと考えている。

読者の皆様、年末年始の忙しい時期、研究活動のみならず忘年会・新年会等の会合も目白押しでしょう。お体には十分ご留意ください。

ではよいお年をお迎えください。（目黒公郎）